研究推進校事業報告書

＜取組と成果のポイント＞
〇外部講師を招いた計画的な研修
　子どもたちの心に響く授業をするために、「教師が感動すること」「素材を見つける目をもつこと」が大切であることを知った。日常のいろいろな感動を集め、「ちっちゃな道徳」としてまとめることにした。それを子どもに話したり、道徳の教材にしたりすることで、身近で心を動かされた出来事を見つけ続けることができるようになった。
　授業を深めるためには、ねらいの明確化やねらいを達成するための発問の大切さなど改めて確認することができた。授業の中で、どのように子どもに問い掛け、子どもを捉えたらよいかが分かってきた。
〇地域を生かした授業づくり
　地域の素材や教育力を、授業に生かすために、地域を見つめ直し授業に役立てた。子どもたちにとってより身近な問題となり、興味・関心を高めた。また、地域の人材をゲストティーチャーとして登場してもらう授業を構想することで、子どもたちに多くの驚きと感動を与え、子どもたちの感性を揺さぶることができた。

１　研究推進校（又は推進地域）の概要

学　校　名	所　在　地	電 話 番 号	児童数	備　考
豊川市立御油小学校	豊川市立御油町膳の棚1番地の４	０５３３(８８)４６５５	５１２人	

２　研究課題
（１）「特別の教科　道徳」の実施を見据えた道徳教育の充実
　①主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てるための道徳教育
　②地域の教育資源を生かした道徳教育
（２）道徳教育の計画的な推進と指導の工夫
　①多様な体験活動を生かした授業づくりの計画
　②価値に迫る教材開発

３　研究主題とその設定理由
（１）研究主題

子どもを捉え、よさを伸ばす「道徳の時間」の在り方

（２）主題設定の理由
　御油小学校は、一町一校の学舎として、明治６年に創設された。御油の松並木を始め、自然豊かなふるさと公園や春には桜の美しい音羽川など、恵まれた自然環境の中にある。子どもたちは、「ありがとう　あなたの笑顔に出会えてよかった」を合い言葉に、明るく伸び伸びと育っている。男女の仲もよく、集団登校やペア交流による活動を通して、学年を超えた交流も親密になっている。しかし、仲がよい反面、自分の気持ちを抑えることができなくなり、ささいなことでけんかになることも多い。相手の立場になって考えたり、行動したりすることができないでいる。また、子どもの日常の姿や学校評価アンケートの結果から、基本的生活習慣が身に付いていない子どもも少なくない。このように、子どもたちの心と体の状況に関わる課題は少なくない。
　昨今、「道徳教育が重要である」と様々な場面で言われている。いじめ問題の深刻化を背景に、

平成３０年度からは、『特別の教科　道徳』として教科化されることとなっている。本校の教員も、道徳の重要性は十分理解しているが、全体計画や年間計画に沿って、きめ細かな指導や実践をしているとは言い難い。『特別な教科　道徳』への移行のこの時期に、視界不明瞭で、不安感をぬぐいきれない現状だからこそ、道徳教育を充実させることが大切であると考える。そして、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てるために、道徳教育の要となる「道徳の時間」の在り方が重要な課題と考える。そこで、研究主題を「子どもを捉え、よさを伸ばす『道徳の時間』の在り方」とした。基本に立ち返り、道徳教育全体計画、各学年道徳年間指導計画の見直しと作成を進め、道徳の時間の質の向上を目指したい。

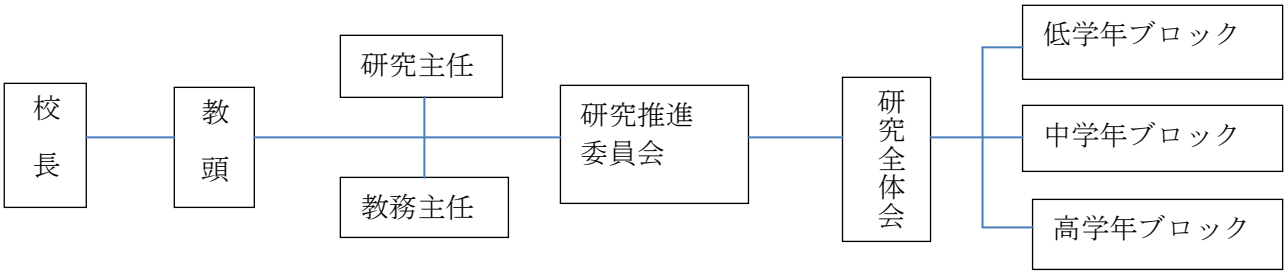
本校は地域との結び付きが大変強い学校である。地域から学校への働き掛けとして、登下校指導や図書館ボランティア、読み聞かせ活動がある。また、田おこしから餅つき会に至るまでの一貫した米作り支援も行われている。学校から地域への働き掛けとしては、「校区内清掃」や「御油の松並木の植樹活動」「敬老会での２年生の作文発表」「御油公民館主催の文化祭への合唱部参加」などがある。このような地域との結び付きを有効に活用し、体系的・構造的に道徳教育を教育課程に位置付けて研究することは、活動自体をより価値あるものへ発展させることにもなると考える。

４　研究の概要及び特色

（１）　研究仮説

子どもたちの心に響く道徳の時間を展開することで、自分を見つめ、捉え、また他者との関わりの中で共に高め合い、よさを伸ばそうとする子どもに育つだろう。

（２）　研究組織



（３）　研究の内容

学習指導要領の趣旨に沿って、「子どもを捉え、よさを伸ばす『道徳の時間』」をテーマとし、道徳教育の指導方法について研究する。授業の実践や校内の教育活動だけでなく、地域との関わりにより道徳的価値観を深めていく。さらに、指導の計画や方法を確かなものとし、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てていく。

①基礎研究

・道徳教育全体計画、各学年道徳年間計画の見直し

②授業研究：子どもの心に響く道徳の授業づくり

・教師が感動する教材の開発（ちっちゃな道徳探し）

・ねらいの明確化

・ねらいに迫る発問づくり

③地域を生かした道徳研究

・御油ならではの地域を生かした授業の研究

・ゲストティーチャーを活用した授業の研究

（４）　研究構想

御油っ子
・恵まれた自然環境に囲まれ、明るく素直で伸び伸びしている。
・自制心や規範意識が低い。生活習慣の確立が不十分。

教育目標
・かしこく《知》：学びの楽しさを知り学んだことを生かす子
・やさしく《徳》：自然や人間を愛する子
・たくましく《体》：心身共にたくましく粘り強い子

本事業の趣旨
・人としてよりよい生き方について多角的・多面的に考え、実践する力を育む道徳教育への抜本的改善・充実を図る

子どもを捉え、よさを伸ばす『道徳の時間』の在り方

道徳教育
・思いやりのある豊かな心をもち、困難に打ち勝って、仲間と共に頑張り抜く子どもを育てる。

めざす子ども像

低学年
　相手を大切にし、自分で考えて行動できる子

中学年
　相手を理解し、思いやり、自ら行動できる子

高学年
　よりよく生きるために、自分の考えをもち、行動に移すことができる子

道徳活動の重点目標
・自ら考え、何事にも粘り強く取り組む
・仲間と信頼し合い、助け合って生活する
・相手やその場に応じて進んで行動する。
・自然や生命を大切にする

地域を生かした道徳研究

松並木愛護会
交通指導隊
音羽川の会
デイサービス　　など

道徳の時間

基礎研究

道徳教育全体計画

各学年道徳年間計画の見直し

授業研究

（５）　研究課題に関わる取組

①道徳概念の統一

研究の基本となる考えについて講師を招いて学習会を行うことで、全職員で共通理解をした。愛知教育大学の鈴木健二教授をお招きして、子どもに響き、よさを伸ばす道徳の授業にするためにどうすればよいかを学んだ。

②素材を見つける

子どもたちの心に響く授業をするためには、まず、教師が感動したり、これは面白いと思ったりする心をもつこと、何でも素材になるという意識をもつことが必要である。そのために、身近で心を動かされた出来事を見つけるところから始めた。それを「ちっちゃな道徳」として、全職員に紹介し、朝の会や帰りの会等で子どもたちに話して聴かせた。

「ちっちゃな道徳」より

沖縄・盲目のテノール歌手　　新垣　勉さん（６２）

「憎しみを感謝に変えて」

歌手生活 35 年を迎えた盲目のテノール歌手新垣は、沖縄県読谷村で、米軍基地に駐留していたメキシコ系の米国人と、現地の日本人女性との間に生まれた。

生後まもなく、助産師が誤って家畜の点眼薬を新垣の目に差したため、光を失った。１歳の時、両親が離婚した。父は帰国、母は再婚、新垣は祖母に育てられた。生活は苦しく、飼っていた犬を食べるほどだった。14 歳の時、祖母が他界した。孤独な新垣は両親と助産師と父を沖縄に連れてきた戦争を憎んだ。牧師との出会いから、大学の神学部へ、そして、テノール歌手の道へと進んだ。

「人の役に立っていると分かると、明るくなれる。自分に与えられたいいものを発見して、生かし合う。それがハーモニーとなり、平和に続く」これが、いまの新垣のモットーだ。「もう両親を憎みはしない。でも、60 年以上たっても、全部ふっきれて許せたともいえない。人間の性かな。憎しみが消えないのなら、それは感謝に変えるしかない」とほほえむ。

５月８日（金）中日新聞より

通勤途中、国府駅自転車置き場を通過するとき、多くの自転車が、強風で将棋倒しになっていました。２０台から３０台ぐらいの自転車が重なるように倒れていました。よく見ると、緑色のジャケットを着ている小学生の登校見守りボランティアらしきおじさんが、倒れている自転車を一つ一つ立てて整頓していました。

ここで質問します。このおじさんはどんなことを考えながら自転車を整頓していたと思いますか。

・・・・・・・・・・

たくさん意見が出ましたね。

私は、このおじさんの行為を見たとき、なかなかできることではないなあ。きっと、「自転車の持ち主が、倒れている自転車を見たときにいやな思いをするだろう」と考えながらやっていたんじゃないかなあと思いました。

「情けは人のためならず」ということわざがあります。どんな意味か知っていますか。

・・・・・・・・・・

このことわざの本当の意味は、「親切や優しさは、巡り巡って自分に戻ってくる」ということなのです。　　６月

このような「ちっちゃな道徳」を子どもたちに朝の話や帰りの会での話として聴かせることで、教師は生活の中で、道徳を意識するようになり、教材になりそうな話題を探す目を少しずつもつことができるようになった。また、子どもたちもいろいろな話題から自己の言動を振り返ったり、比べたりすることができるよい機会になった。教師の短い投げ掛けは、道徳性を養うものとなっていった。

③授業を深めるために

心に残ったこと、心に響いたことを教材にして、授業に取り組んだ。まず、ねらいをよりり明確化することから始めた。ねらいが焦点化するとそのねらいを達成するために、どんな資料でどんな発問をすると、教師の感動を子どもたちが感じることができるかを考えた。また、考えを深める補助発問や、自分の考えをよりはっきりさせるための教材の作成や提示の仕方を考えた。そしてワークシートやペア対話の活用など子どもたちが本音で話し合い、自分のこととして考えを深めることができる授業にするための検討を繰り返した。従来行ってきた読み物資料を使うだけの道徳の授業から、いろいろな角度から見直しを加えた授業構想ができるようになった。教師自らが道徳を楽しんだり面白く感じたりするようになった。

④みんなで見合う

授業の計画を立て、できるかぎり授業を見合った。とおり一遍の道徳の授業だったものが、教師の感動で組み立てられた授業へと変わっていく様子が、互いの参考となり刺激となった。授業分析会では子どもの発言や板書の記録などの検討だけでなく、写真やビデオも活用して、授業記録では感じ取れない子どもたちの表情や様子からも、ねらいに迫ることができていたかの判断材料にした。

⑤分析会を開く

授業記録を基に、教師の投げ掛けや子どもたちの意見を見直すことで、ねらいが達成できたか、ずれてはいなかったかなど話し合った。考えていた発問が子どもの本音を引き出せなかったり、上辺だけになってしまったりしたときには、「資料提示はよかったのか」「どんな発問が適切だったのか」など、時間を掛けて練り直すことで、次の授業や他のクラスの参考とした。

⑥地域を生かした授業づくり

子どもたちの心に残る、心に響く授業づくりのために、何を教材として取り上げるかが大切であると考え、社会のいろいろな出来事や地域との関わり、年間計画とも照らし合わせながら十分検討した。同時に地域の行事と子どもたちとの関わりや地域の人材を洗い出した。地域ま

たは学校のために活動してくださる方は多く、この人材をぜひ活用したいと考えた。いろいろな体験や優れた技術、努力して築き上げた人生経験などをもつゲストティーチャーに接し、その生き方や考え方に触れることにより、子どもたちは大きな感動を受け、よりよく生きていこうとする道徳性を身に付けることができると考えた。ゲストティーチャーの登場は、子どもたちにとって驚きと感動を与え、強く印象に残った。話を食い入るように聴く子どもの様子に、人との出会いが子どもたちの感性を揺さぶるのを感じた。

⑦授業実践

ア　２年「みんなで気持ち良く」内容４－（１）規則の尊重、公徳心

学校の近くに「東三河ふるさと公園」がある。地域の方々の憩いの場所になっている。子どもたちもよく利用し、遊んだり、木の実を拾ったりと自然との触れ合いの場所にもなっている。多くの方が利用しているにもかかわらず、他の公園に比べてごみが落ちていることが少ない。管理されている方の話を聞くと、毎朝２時間かけてごみを拾いながら見回るそうである。これに驚き感動した教師が、「この方をゲストティーチャーにお招きして、子どもたちにじかに語っていただくことで、自分たちの生活を見直す機会にしたい」と、授業を組み立てた。

教師が感動したことからねらいは何にするのか、そのねらいに迫る発問をどのように組み立てていくかなど、具体的に授業の在り方を考えた。

まず授業のねらいを「みんなで使うものを大切にしようという気持ちを養う」と決め、１回目の授業を行ってみた。このときの検討会では「教師の感動は何か」「教師の心が動かされたことは何か」を明確にしなければ教師の感動を伝えることができないと分析された。２回目の授業でのねらいを「みんなで使う場所をきれいにしておこうと頑張っている人がいることを知り、自分も気を付けていこうという気持ちを高める」とより明確化された。

また、１回目の中心発問「どうしてこんなふうになっちゃったのかな」は漠然とした発問であり、これでは子どもの本音が出ず、ありきたりの感想になったと分析された。そこで、２回目の授業では補助発問として「この教室は、ごみの落ちていないふるさと公園とごみの落ちている公園とどちらの公園に近いかな」と公園と教室を比較する発問に変えた。すると子どもたちは、教室に多くのごみが落ちていることを意識し始めた。そして、中心発問が「この教室には、ゲストティーチャーみたいな人はいないかな」に変更したことで子どもたちの生活の場面でも教室をきれいにしようと頑張っている人がいることに気付かせることができた。

１回目の授業ではゲストティーチャーに授業の最後に登場していただき、話していただくだけであったが、それでは子どもとの関わりがなく、有効に活用されていないことに気付いた。そこで、２回目には子どもたちとの関わりがより深くなるようにと、子どもによるインタビューの形で授業の始めにも登場していただいた。また、教室をきれいにしようと頑張っている子どもと握手していただくよう、触れ合いの時間を設定した。温かい雰囲気の中で話された最後のお話は子どもたちの心に染み渡っていった。教師の感動を明確に子どもに伝えたいという教師の思いが、子どもの心に響く授業となった。

イ　５年「かけがえのない、ふるさと御油の音羽川」　内容４－（７）郷土愛

御油町の中心を音羽川という川が流れている。春には川の両側に植えられた桜がきれいに咲き、お祭りのときには、花火が上がり、みんなの生活の中で親しみのある川になっている。この音羽川は、いつ見てもきれいに草が刈られ、ごみが落ちていない。他の川と比べるとはっきりその違いが分かる。そんなふるさとの川を守っている「音羽川の会」の人たちがいることに子どもたちは気付いていない。この人たちの存在を知り、ふるさとの川を見つめさせることで、ふるさとを大切に思う心を育てたいと願い、授業を行った。

この第１回目の授業を通して、講師の鈴木教授からは道徳授業づくりの基礎となる次の四つのポイントがあることを学んだ。

・その資料ならではの「ねらい」を設定する
・資料に興味をもたせる（読みたいと思わせる）
・「考えたくなる」「考えざるをえなくなる」等の思考を刺激する発問を工夫する
・身近な問題として意識付ける

２回目の授業では「音羽川を大切にしたい」というだけでなく、「その川をいつまでもきれいにしておきたいという思いがあることに気付かせる」をねらいにするために、資料に、音羽川の写真を使った。

さらに資料に興味をもたせるために、音羽川と比較できるように他の川の写真を提示したり、御油の自慢をランキング形式で考えさせたりしたことで子どもを資料に引き込ませることができた。

そして、「音羽川の会」の人たちが川を守る活動をしていることを紹介した。「音羽川の会」の人たちは、月に２回（夏場は毎週）草刈りをすることを主な活動としている。ゲストティーチャーとして「音羽川の会」の方にインタビューした動画を流した。直接来校していただくことができなかったので、動画という形で登場していただくことにした。子どもとじかに触れ合うことはできなかったが、授業での活用場面を検討できたり、必要な部分だけを使うことができたりと、動画ならではのよい面も多くあった。

１回目の授業では、中心発問「あなたは『音羽川の会』に入りたいですか」に対して「音羽川の会」の話に感動した子どもたちは、ほとんどの子が「入りたい」と答えた。しかし、「子どもたちの意見をそのまま受け入れるだけに終わったため、うわべだけの話し合いになってしまい、深まらなかった」「どうして『入りたい」と思ったのか、理由を深く掘り下げることが必要』と分析された。本当に入りたいのかじっくり考えさせる（考えざるをえない状況にさせる）ことが、ねらいに迫ることになると分かり、２回目の授業には中心発問を「御油にとって音羽川は必要なの」と変えることで、子どもたちの考えを深めることができた。

授業の四つのポイントを考え、実践することで、音羽川がより身近になり、子どもたちにとってただ遊ぶだけの川であった音羽川が、「きれいな川に保ちたい」「美しい川であってほしい」という思いに変わっていった。

５　研究の評価

（１）　研究の成果

子どもたちの心に残る、心に響く授業づくりのためには、教師が心に残ったり、感動したりしたことから素材を見つけ教材化することの大切さが分かった。その教材を子どもの実態や他教科との関わりを考える中で、道徳の授業に生かせるように十分検討を加えた。そして、地域の行事や地域の人材が活用できるかどうかを洗い出した。

身近な地域教材は、子どもの興味・関心を高めた。そして、教師の自作の資料が子どもをさらに引き付け、授業にのめりこませることができた。その結果、自分の事として真剣に議論し合う姿につながった。さらにいろいろな体験や優れた技術を有し、努力して築き上げた人生経験をもつゲストティーチャーの生き方や考え方との出会いは、子どもたちに多くの驚きと感動を与えた。話を食い入るように聴く子どもたちの様子に、子どもたちの感性が強く揺さぶられるのを感じた。これらの体験は、今後よりよく生きていこうとする道徳性を身に付けることにつながっていくと考えている。

研究を進めていく中で、「総合との違いや区別はあるのか」という疑問にぶつかり、その点

についても鈴木健二教授から示唆をいただいた。教授からは、「指導要領をじっくり読んだ上の自分の解釈でよい」という教えをいただいた。大切なことは、「子どもたちにとって意味のあるものであること」「重なり合っていてもよいので、広く捉えればよいこと」など具体的に指導していただいた。それ以後、自信をもって道徳の授業に取り組むことができた。

本事業を通して、従来行ってきた読み物資料を使うだけの道徳の授業から、いろいろな角度から見直しを加えた授業構想ができるようになった。授業の中で、どのように子どもを捉えたらよいか、その中によさを見出し、どのような問いかけで伸ばしていけるか少しずつわかってきた。教師が感動したり、これは面白いと思ったりする心をもつこと、何でも素材になるという意識をもつことが必要であることが分かり、身近で心を動かされた出来事を見つけることを続けるようになった。そして、何より教師自らが道徳を楽しんだり面白く感じたりするようになったことが、本実践の大きな成果であると考える。

（２）　今後の課題と取組

教師が子どもを捉える目をもっと鍛える必要があり、子どものよさを発見して、それを学級全体に広げ、集団を育てることが大切になってくる。そのために、1 時間 1 時間の道徳の授業を大切にしていきたい。そして、その 1 時間の授業が、子どもたちにとって道徳性を養う時間になるように、「考える道徳」「議論する道徳」をもっと研究する必要がある。